29pmG-052S

肺がん患者への継続的な薬剤管理指導業務を実施して学んだこと

○北垣　亜由美[1], 櫻井　登代子[2], 起塚　美沙[2], 高田　雅弘[1], 奥野　智史[1], 上野　仁[1], 三浦　誠[2]（[1]摂南大薬, [2]洛和会音羽病院薬）

【目的】がん化学療法の治療効果および副作用出現状況は、患者によって大きく異なる。このため、がん化学療法を行う患者は様々な不安を抱いている。今回、肺がん患者との関わりを通して、患者の不安を軽減するために、薬剤師はどのような役割を担うべきか、そのためには何が大切であるかを考えた。

【方法】対象患者は、58 歳の男性であり、入院時、右上葉肺がん StageⅣ期と診断されていた。EGFR 遺伝子変異陽性であったため、入院後ゲフィチニブが投与開始となった。病院実務実習中の平成 24 年 6 月から約 1 ヶ月間、指導薬剤師の指導の下、本患者に対して継続的な薬剤管理指導を行った。また、週 1 回の呼吸器科カンファレンスにも参加した。

【結果】継続的な薬剤管理指導を行うことにより、患者の服薬状況や副作用出現状況を詳細に確認することができた。毎日訪床することで、患者と良好に意思疎通を図ることができた。また、カンファレンスへの参加により、医師の治療方針を知るだけでなく、医師や看護師と情報の共有化を行ったり、患者の希望に沿った処方提案を行うことが出来た。

【考察】継続的な薬剤管理指導の中で、最も大切であると感じたのは、患者と良好な関係を築き、薬学的立場から患者の精神的不安、肉体的不安を取り除くことである。このためには、一人の人間として、目の前の相手（患者）が何を求めているのかを常に意識することが必要である。さらに、薬剤師は薬の専門家であるというプロ意識を持ち、薬剤に関する全てのケアに対して責任を負えるよう幅広い知識を持たなければならないと実感した。